「僕の出会った詩人たち」#12　馬野ミキ

一年間毎月一人の詩人、及び詩人と思われる人について「新次元」に、平居さんに描かせていただいた
振り返ると「作品」以上に、「生き方」というものを自分は見ているかなあと思った
一年前、「僕の出会った詩人たち」というテーマで原稿の依頼を頂いた時
詩人って世界に同時期にそんなに現存するかなあと思った
ベートーヴェンとかモーツァルトとかゲーテとかブコウスキーとかサン＝テグジュペリとかシャガールとかルイアームストロングとか
そんな同時期に同世代にクラスメイトのなかに一杯いるなんて不自然でしょ？と

でもこの最終回を書くにあたりまだ紹介しきれていない人が沢山いるなあ
という事は思う
顕微鏡を覗き、フォーカスしていけば
その細胞の数はこれで事足りるということはないのではないかとも思う
直観に頼り最終回をまとめたい

---今村知晃

詩の朗読(敢えてポエトリーリーディングとは言わず詩の朗読と言いたい)では、今村知晃の爆発力は群を抜いていた
同じく詩の朗読のユーリと結婚し子をもうけ
すっかりこのシーンからは退いているが
詩の持つ原始的な要素を彼は体現していた
自分にとってはスラム(詩や言語表現での朗読競技)でもっとも対戦したくない相手
彼が上京する前、京都でchori君が彼を高く評価していたがchori君は見る目があるなあと思った
なぜなら評価する言葉を作り上げること自体がとても難しい作業になるからだ
さいとういんこさんが起こしたＳＳＷＳ(シンジュクスポークンワーズスラム)にて
客のラッパーが今村知晃の朗読をみて「こわい」と呟いたのを聴いたことがある
彼は不良っぽさやイカツさとかとは正反対に位置する
そういう怖さではない
ましてやお化けのようでもない
根源的なこえと言葉に対する「恐れ」であると自分は感じた。

---中川ヒロシ

自分が湯原君と共に編集をしている「抒情詩の惑星」https://poetry2021.webnode.jp/
の中川ヒロシ　プロフィール作品一覧頁はこちら　https://poetry2021.webnode.jp/%e4%b8%ad%e5%b7%9d%e3%83%92%e3%83%ad%e3%82%b7/
詩集を出したいと言っておられるからうまく縁が繋がらないかなと、
普段詩集を読まない自分が、この人の詩集を読んでみたいと思える稀な方
それが普通に例えば五万部くらい売れるのではないかと思えてしまう
詩集で五万部とは大袈裟に思えるかもしれないが日本の人口で割ってみるとそれ程突飛なパーセンテージではない
作品のなかに配置された小宇宙が中卒の自分のような無学な人間にも読んでとれる
ヒロシさんと始めて出会ったのは東京で行われたスラムの大会で自分は優勝か準優勝したのだと思う
その時話しかけられた
対戦相手たちより、圧があった
それはたぶん人を殺したような人はおとなしくしていてもオーラが出てしまうみたいな
二度程三重から東京への用事でうちに寄ってもらったことがある
クーラーボックス一杯につまみとお酒を持ってきてもらい何故か携帯用のガスコンロで焼いて食べさせてもらった
濃ゆかったであろう人生のバックボーンとサービス精神が調和して温かい気持ちになれるポスト谷川俊太郎と言い切ってみたい
桑原滝弥君とはかなり古くからの知り合いらしい。

---石渡紀美

埼玉の桶川には新納新之助、向坂くじらもいるので強い自治体だなと思う
言葉と声の両立性へ

男と女
大人と子供
そういう、分別され、これとこれは違うよ　といったものの中に分け入って
修正を試みようとする態度が石渡紀美の詩だと思う

おとなってじぶんをはげますようにいうよね

原発がはねて
参加したある集会で
大人たちは
これからのことを話し合っていた
時々、声を荒げて

「大人たち」石渡紀美

冒頭部より引用
全文　NOTE https://note.com/jupiteriya/n/ne8f53013c1c7

「原発」というワードが日常会話の如くさらっと出てくるが
メインのテーマは「反原発」ということではないだろう
むしろ「反原発」という正義を書く方がたぶん簡単な作業だと思う

「時々、声を荒げて」
「誰も誰の話も聞かない話を」

これは現代の私たち大人の姿であり
に対する7歳の子の解釈はあまりにもいとおしい

最新刊に第五詩集「ハロー、ネイバーズ」(プリシラレーベル)
紀美さんから買う　jupiteriya1204@gmail.com
ネコオドル　https://twitter.com/chacoaqua

2023.10/6〜11　埼玉県寄居町「詩と版画と切り紙作品展」
石渡紀美　ツイッターhttps://twitter.com/jupiteriya　インスタ　https://www.instagram.com/jupiteriya1204/

---古溝真一郎

20年くらい前に２ちゃんねる詩・ポエム板で出会う
のちのち分かった繋がりは寺西さんで、彼は詩マーケット(日本初の詩集等の即売会)の手伝いをしていたという
いまは同じ練馬区に住んでいるが年に一度も会わない
自分は離婚をしたが、互いの子も随分大きくなった

「詩学」第一回新人を獲った、同じく２ちゃんねる詩・ポエム板きっかけで出会ったクロラ君曰く
寺西さんは「詩学」の次の編集長の候補として古溝くんを考えていたそうだ
２ちゃんねる発信の同時多発朗読会を企画し
東京　おれ(HN:都立家政)
大阪　古溝真一郎(HN:激辛正統派)
仙台 構造、POGE
詩の朗読の大きな野外イベントを打って古溝君に営業部長になってもらったのはいい思い出
寺西さんが現れなかった寺西さんの送別会の飾りつけを一緒にして(百均で買ってきた造花の桜をライブハウスの天井に散りばめた)
寺西さんが亡くなったマンションの現場検証で居心地悪そうに二人で突っ立ってた

古溝君と自分が例えば同じクラスにいても多分仲良くなったりしていないのではないかと思う
でも互いに気づかないまま図書館で同じを本を借りてる、みたいなところが彼にはある。

詩集に「きらきらいし」(七月堂)

---しげかねとおる

元「詩学」編集者。
後に１０００番出版を立ち上げる。
1000冊の詩集を出す！という意気込みを聞いたことがある気がする
その第一号として自分の初詩集「子供の晩年」を出して頂いた
いま白昼社から出ている「子供の晩年」は、その復刻版になる
究極Q太郎さんや蛇口くん、TASKE等　詩壇?から一定の距離をもった詩人たちにフォーカスしたが、のちにシーンを離れる

も、別名義で最近少し見かけることがちょこっとあり嬉しい
自分が「詩学」で現代詩批判をしていた頃「そんなおじいちゃんやおばあちゃんいじめたったしゃあないやん」と
さらりと言って頂いた
どこかで大きな地震があった後、しげかねさんは自分の主催するオープンマイクの朗読会に訪れて「こんなことしてる場合やないやろ！」と言われた気がする
それはちょっと方向が違う話だとも思ったけれどその心情は分かるつもりでいた
しげかねさんが、作品としての詩人というよりも、存在としての詩人にこだわっているのは自分と似ていると思う。

---モリマサ公

スノーボーダーでもある
大島健夫くんが武術をしているように、その何というか
スポーツが駄目だから文学部に入った　みたいなのって弱いなって思う　詩人として　説得力として
モリさんも暫く詩の界隈から消えていたが、ここのところかなり精力的で新しい詩集を出され
朗読で全国をまわっている
先月朗読を聞いたがちょっと尋常ではないなあと感じた
勿論それはパフォーマンスとしてはとても素晴らしいものだったということであるのだけれど
モリさんの身が心配だということでもある
いい音楽とかいい映画とはまた、いい詩が異なるところだ

最新刊「絶望していろ、バーカ」(しろねこ社)
https://shironekosha.thebase.in/items/72977827

もう何人か書こうと思ったけれど、そもそも元々音楽をやりに東京にきた自分がいま

ここまで「詩」に関わっていることについても不可思議に思う
第十回で書いたともちゃん9さいのお誕生日イベントをきっかけに自分は新しいバンドを組むことになった
今年５０になるが身体を動かしたいと思う

平居さん
新次元の読者の皆さん
一年間自分のつたない文章につきあってくださり、どうもありがとうございました

また宇宙のどこかで！

馬野ミキ